HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	(中東欧の)教会と社会 ： 宗教多元化時代の教会運営
Author(s)	櫻井, 義秀
Description	中外日報　2009年12月5日掲載
Citation	中外日報
Issue Date	2009-12-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48044
Type	article
File Information	Chugai_kyokai.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

教会と社会　宗教多元化時代の教会運営

櫻井義秀

1　教会税のゆくえ

2009 年 10 月 13 日から 22 日まで中東欧に出張した。通過した国も含めるならば、チェコ、スロバキア、ハンガリー、セルビア、ブルガリアの 5 カ国を廻る充実の 10 日間である。

札幌から成田経由でパリへ行き、パリからプラハ経由でスロバキア共和国の首都ブラスチラバに着いた。旅行社が手配してくれた安価で短時間のルートだったが、成田からオーストリアのウィーンにダイレクト便で入り、そこからタクシーで国境を越えてもブラスチラバのホテルに 1 時間で着く（100 ユーロかからない）と知ってがっかりした。ヨーロッパ内の 2 本の乗り継ぎ便が無駄だった。この地域に出かける方は参考にしていただきたい。

14-15 日は、天使大学の田島忠篤教授と一緒にスロバキア共和国の首都ブラスチラバで「21 世紀における教会のファイナンスと宗教社会」という国際会議に出席した。日本人は私達だけである。日本の宗教団体と宗教法人法、教団経営、新宗教運動といった話題を報告したが、主たる論題は教会税と教会の資産返還をめぐる問題だった。

教会税というのは、スイス、ドイツ、オーストリアの中欧やデンマーク、スウェーデン、フィンランド、アイスランドの北欧の諸国において、税務署が教会に代わって税を徴収する制度である。ドイツの場合でいうと、ナポレオンの時代に教会はドイツ諸侯達によって所領を没収された（世俗化された）が、経済基盤を失って弱体化した 19 世紀後半に自らの教会員に対して租税を徴収する権利を与えられた。カトリック教会と福音主義教会に認められたこの特権は現在のドイツ基本法でも認められており、州政府は住民に所属教会を尋ね、上記二教会であれば所得税の 8 パーセント相当額を付加価値税として徴収し、教会に配分している。教会財政の大半、牧師の給与も教会税でまかなわれている。北欧諸国の比率は低く、1～1.5 パーセントであるが、所得税が相対的に高いことには留意すべきだ。要するに、年収 500 万円の人であれば年間 10 万円程度が教会税として徴収されるのだという。

ところが、教会税を持つ国で近年困った現象が相次いでいるらしい。

①高額所得者や若者達の中に「教会に所属しないが信仰を維持する」という人達が現れている。教会側はクリスマス礼拝や葬儀等において教会税を納めている人を優遇するといった対抗策を出している所もあるようだが、宗教心の世俗化（教会離れ）は止められない。

②グローバル化の影響で国家が特権を認めた教派以外の諸宗教（カソリック国における福音主義教会、エホバの証人等）が増えてきており、徴税の権利がない不平等を指摘する。

③信教の自由（信仰告白を強制されない）と政教分離を原則的に考える人達には、伝統宗教の特権が国家と教会のもたれ合いのように見えてしまい、この種の意見が強まっている。

要するに、財政的基盤が揺らいでいる現在、西欧のキリスト教会はいかにして経営の安定化を図るのか、教会税の正当性をどのように説明するのかを迫られている。ちなみに、ドイツのカトリック教会における 1992 年から 2007 年の教会税の伸びはわずか 7 パーセントである。教会税を課していない国でも、スペインのように教会への自発的な目的税や消

費税の非課税を見直す論議が活発であり、イギリスでも教会関連の社会事業に対して補助金を出すが、使途は厳しくチェックされる。世界経済が収縮している今日、国税を使うものには教会であろうと厳しい国民の視線が注がれ、政府も予算の縮減をねらっている。

2　教会を元通りに

西欧教会の悩みを既得権益が失われる不安と要約するならば、旧東欧諸国のカソリック教会や正教会の問題は共産党政権により奪われた権利の回復といってもよい。ブラスチラバから 70 キロ離れたニトラの町で開催された 16 日の会議は神学校で行われた。

この教会敷設の建物は共産党政府により接収され、50 年近く農業協同組合の事務所・トラクター等資材置き場として使用され、荒廃していた。それがようやく 1990 年に成立した損害賠償法とその後の実施法によって修復され、神学生が学べる施設になった。共産党は施設や備品を接収したのみならず、聖職者に弾圧を加えた。多くの神父が地下教会で活動し（ふだんは溶接工だが、隠れてミサを行う等)、共産党の覚えがめでたい教会と聖職者のみが活動を認められてきたのだという。復権した聖職者の熱い語りが印象的だった。

但し、復元には時間がかかる。定められて期間内に接収された備品や所有地の登記書等を用意し、法廷において教会側が返還を請求しなければならない。廃墟に近い施設の補修は文化省が担当しているが、限られた予算・人手のために遅れている。カソリック、正教、福音主義教会は信者を取り戻したが、西側と比べて所得が相対的に低い一般市民による 1.7 パーセントの教会税と献金では教会が維持できない。聖職者の給与は全額国庫負担だが、毎年 5 パーセントずつカットされていると隣国チェコの聖職者も危機感をあらわにした。

中東欧諸国は EU 圏に入ることで経済成長を期待しているが、市民生活が不安定化している側面もある。教会が社会に果たす役割は西側より大きいために国は教会を支えようとするが、予算が足りない。政府は教会に対して負債（賠償）を抱えている状態である。

3　ブルガリアの大学とリラ僧院

スロバキアでの会議を終えて、ブラスチラバから午前の国際特急でブダペストを経由してベオグラードに行き、そこで夜行寝台特急に乗り換えて翌朝ブルガリアの首都ソフィアに着く予定だった。ところが、列車がベオグラードに 1 時間半遅れて着いたために接続できなかった。英語の分かる窓口で文句を言い、代替の宿泊施設を要求して「ロマンチカ」という水シャワーの安宿にたどり着いた。クレームを付けなければそのままであり、まさに権利とは主張すべきものである。翌朝の振り替えさせた特急の窓ガラスは汚れで外がかすみ、スチームは昼頃に効いてくるという代物であり、セルビアからブルガリアにかけての厳しい旅券審査を経てブルガリア領内に入った時は、田島教授と安堵のため息をついた。

この話をソフィアで披露すると、なぜブラスチラバからソフィアまで飛行機（1 時間、1 万円程度）で来なかったのかと不思議がられた。まる 2 日で 3 万円払った中東欧の国際列車は、「世界の車窓から」の旅を期待した私達に得難い経験をくれた。

ソフィアにあるブルガリア・アカデミーの哲学研究所と 100 キロ離れたブエゴエフグラードのサウスウェスト大学（通常の大学は）で講演して東欧の研究者と交流した。ブルガリアではかつてアカデミー所属の研究員のみ研究を行い、大学は教育だけを行っていたが、現在はどちらもやる。しかし、一目研究予算の違いが窺われる。それでも、アカデミー、大学の双方で日本の経済発展と宗教的経済倫理との関連を問われたのが印象的だった。

世界文化遺産である正教のリラ僧院は、ブエゴエフグラードからタクシーで 40 分の距離だが、是非足を延ばされることをお勧めしたい。聖人リルスキーが 10 世紀に開山したと伝えられる。城砦に似た 4 階建ての僧院に囲まれた中庭に聖堂があり、見事な造形美である。